

授業科目 生理学 I

【担当教員名】 宮岡 洋三、蘆田 一郎 (担当順)	対象学年	1	対象学科	理学・作業
	開講時期	前期	必修・選択	必修・必修
	単位数	2	時間数	30・30

【概要】  
生理学は解剖学と並んで、「生体」を理解する基礎となる。解剖学が「生体の構造」に主眼を置くのに対して、生理学は「機能（働き）」の理解を目的とする。両者は互いに密接に関連しているため、「生体」の理解にとって車の両輪と言える。本科目では、生体機能の基礎となる細胞機能、神経・筋機能、感覚機能、内分泌機能を学ぶ。なお、本科目は後期の「生理学Ⅱ」の基礎となる。

- 【学習目標】
1. 細胞機能－ホメオスタシス、体液（区分、組成）、細胞小器官・骨格、物質移動（拡散、浸透、担体性輸送）－について説明できる
  2. 興奮の発生と伝導－刺激と興奮、興奮閾値、不応期、静止膜電位と活動電位の発生機構、膜の等価回路、イオンチャネル、興奮伝導の三原則、跳躍伝導、二相性・単相性活動電位の記録、伝導速度の測定、神経線維の分類－について説明できる
  3. 筋収縮－骨格筋の機能的名称、収縮測定法、単収縮と強縮、興奮収縮連関、張力-長さ関係、滑走説、力学モデル、負荷-速度関係－について説明できる
  4. シナプス伝達－神経筋接合部、終板電位、神経伝達物質、シナプス後電位、シナプス前抑制、シナプス結合様式、シナプス伝達の可塑性－について説明できる
  5. 自律神経機能－自律神経系の構成（中枢、末梢）と作用、自律神経系の伝達物質・受容体－について説明できる
  6. 感覚機能－感覚受容器、受容器電位、感覚強度、体性感覚（表面・深部）、特殊感覚（聴覚、平衡感覚、視覚）、各伝導路－について説明できる
  7. 内分泌機能－各種ホルモンの分泌器官、標的器官、作用、分泌調節－について説明できる
  8. 腎機能、酸塩基平衡－水・電解質の調節、蛋白代謝産物の排出、腎の内分泌機能、排尿、酸塩基平衡（血液の緩衝作用、pHの呼吸性・腎性調節）－について説明できる

回数	授業計画又は学習の主題	SBO番号	学習方法・学習課題又は備考・担当教員
1	細胞機能の基礎		講義・宮岡
2	細胞の興奮発生		講義・宮岡
3	興奮伝導		講義・宮岡
4	骨格筋の収縮 (1)		講義・宮岡
5	骨格筋の収縮 (2)		講義・宮岡
6	興奮伝達		講義・宮岡
7	感覚の一般的性質、体性感覚 (1)		講義・宮岡
8	体性感覚 (2)、特殊感覚 (1)		講義・宮岡
9	特殊感覚 (2)		講義・宮岡
10	自律神経機能		講義・宮岡
11	内分泌 (1)		講義・蘆田
12	内分泌 (2)		講義・蘆田
13	内分泌 (3)		講義・蘆田
14	腎機能、酸塩基平衡		講義・蘆田

【使用図書】	<書名>	<著者名>	<発行所>	<発行年・価格・その他>
教科書 (必ず購入する書籍)	「生理学テキスト(第4版)」	大地 陸男	文光堂	2003年・5,040円
参考書	生理学に関する各種の書籍が本学の図書館に用意されているので、自主的に参考にして欲しい。特に重要な書籍については、授業中に指定する。			
その他の資料	担当教員らによる「生理学サイト (URL: <a href="http://www.nuhw.ac.jp/physiol/">http://www.nuhw.ac.jp/physiol/</a> )」があるので、講義内容の予習・復習などに活用して欲しい。また、本学図書館には、生理学に関する各種ビデオも用意されているので、それらも適宜活用して欲しい。			

【評価方法】 授業への出席と試験（「小試験」＋「期末試験」）を評価の対象とし、評価全体に対してそれぞれ30%と70%の割合とする	【履修上の留意点】 上の【概要】にも記した通り、本科目は「生理学Ⅱ」と連続している。したがって、「生理学Ⅰ」の習得が不十分な場合には、「生理学Ⅱ」の理解が困難となるので注意する。なお、期間中3回程度の「小試験」を実施する予定なので、各自が学習の到達度を随時確認する。
---	--

作業療法学科 専門